

とも一石を下し候に、一手毎に三百六拾手宛有之事を工夫  
 仕、詮議を極置候て打申候。四方八面何方にても有所毎に、  
 三百六拾手候。若盤上に三百六十一目有之碁盤有之候は  
 ど、其時は不及是非候。三百六拾目にさへ極り候はゞ、何  
 時も此方勝理窟に候。家兄此話を聞て云。碁盤の目は三百六十一目有之候。此理窟は碁で致工夫置候。此所之語三百六十一目と作して可也と云。愚云。目は路也。朱子語類九十五卷。碁盤三百六十路とあり。三百六十一路には無之。碁可也。先づか様には候へ  
 共、爰には人品の入申事候。圍碁の理窟を極候は某と同一位  
 に候處、相手、某より人品すぐれ候て、勝負の際に臨て聊  
 もせき申氣味無之、且又氣根至極強候て、草臥申儀少も無之  
 者に候はゞ、其者勝可申候。乍然是も大なる違は無之、唯半  
 石の強みと可存候と申候。面白申様に候。詩も又如斯の旨  
 被申候。於此先生發明有之候。堯舜湯武皆聖人也。然共湯  
 武を以堯舜に比れば、未盡善の所あり。湯武の時に當て堯  
 舜出給はゞ、征伐を用ひ給はずして天下自然と堯舜の天下  
 と成べし。こゝは人品による所なり。是湯武は半石の弱み  
 あり。理窟迄にては湯武の征伐も、堯舜の揖讓も共に道理  
 に叶へり。同一聖人なれども於是不同ある事は、人品の上  
 にあり。某共は堯舜湯武は過所之時異なれば、其事も亦異也とのみ可申所に、先生之發明超然たる事に候。天下の道理程朱

に至て極矣盡矣。性の一字を説ては本然の性、氣質の性を  
 以て説盡して復餘蘊なきが如し。然共聖人有之出給はゞ、  
 其氣象格別ならん。爰は彼人品の入處なり。  
 一、擬願命と題せる一小冊の事  
 此間林家の門人、擬願命と題せる一小冊を刻行す。林氏の  
 歴々各序跋を加て褒美す。願命の二字を以て之を思へば、  
 文昭公の御遺詔などを、刊行も仕たるかと思はる。左様に  
 候ても、京師縉紳家など不快に可思やなどと申合へり。然  
 處擬願命を聞すれば、己が母の臨終の遺言を載たる書也。  
 剩へ念佛して臨終せる由を記す。誠に好笑々々疎末の至  
 に候。  
 士大夫臨終之遺命をも願命とするす。但漢書に多見えた  
 り。  
 一、芳齋青木新兵衛の事  
 青木新兵衛は方齋入道とも三代つゞくか。方齋は渡り奉公  
 せし人か可尋。越前少將忠直卿是は一伯殿也。孫門秀頼に被召仕。實重昭宮の孫たり。就夫物語有之爲證據記之。越前忠直之臣永見主膳、子息鑑  
 の着初を三宿勘兵衛に頼む。勘兵衛は名高者。故秀康の御抱守にて御足藏之處、忠直代に成賞版も無之に付、不足

中根を乞、散々の首尾に罷成取給。是を遺恨に思ひ大坂に罷城し、吾此軍御利運に於ては、越前を可給と約束し、自ら三宿越前と稱し忠直の手に向ひ戦死す。忠直の臣西尾仁左衛門、三宿を討取と。但野木右近討取か。其時一座に有合若き衆、勘兵衛へ武功の咄を望む。卑下して不語、強て望ければ某一生の内ゆゑ、敵に出合事あり。何所の合戦と聞ければ失念也。某曾て聞。膝少岳合戦の時、云は湖水の。戰場日既に暮れ互に引取所に、健なる敵一人來る。予も立向しが敵曰。今朝より雜人原を突て鐘先けがれたり。少待給へとて澤水にて鎗先を洗落、青木新兵衛と名乗懸る。予も名乗り突合けれども、互無勝負内日没しぬれば、後日に參會仕らんとて相引に退く。か様潔き武者は外には又も不見と云。其時勝手の者共、次の間に伺候して聞ける其中に、常々主膳方へ出入の浪人あり。是も其日勝手に働けるが、此物語を聞て其座中へ出る。傍人とゞめけれども不聞入、進出て云やうは、扱もく珍敷人に出合たり。其鎗の相手は某也とて、其時の様子互の鎧の色以下、物語するに符合せり。是より青木が武名露顯し、則忠直へ被召出。是方齋也。岡部自休入道は忠直の時、町方・郡方・公事方様々の奉行兼役にて出頭す。然るに自休が領知の百姓の女を、布施但馬が領知の百姓に嫁す。一年相馴て後、夫が用

事有て佐州へ行けり。三年迄不歸。定て死たりと思ひ、其妻は近所へ再縁して子を産す。其後先夫佐州より歸り、妻の事を聞て代官所へ訴ける所に、自休郡方公事場勤けれ  
 ば、堪忍せよとて理非も不糾年も暮ぬ。明年正月彼舅百姓方へ、婿及一門共を朝拜に招ける處、但馬聞之、夜潜に人をして舅の家の廻りを燒草を積、火を發て一人も不殘焚殺す。忠直聞給ひ大に怒て諸方に札を立、訴人あらば黄金十五枚可賜と也。此時但馬が家僕中野長兵衛と云もの、連々但馬に恨ありて、此事を訴へ恨を報いんと思ひ其妻に語る。妻聞之様々異見すれども、不聞して自休方へ行。妻思ふは不義ゆゑ利なき子供まで失ん事不便也とて、但馬方へ行き長兵衛訴人に出る事を告且言く、か様に申上るは子供御助命の願也と云。尤也とて頓て長兵衛を捕へ座敷へ押込置。長兵衛調儀を以て夜中遁出。番人追懸ければ塀を越え、近所の牧野主殿宅へ走入。追手者斷けれ共不出。隣家竹島周防は主殿が舅故、是へ遺所に周防下屋敷へ遣し長兵衛を殺害す。扱此越忠直聞給ひ大に怒り、遂に布施但馬は自殺。事長き故。此儀駿府へ聞え、家康公大に怒給ひ、自休が進退も